

「ファウスト伝説」の変転

藤 本 正 幸

Wandel der Faust-Sage

Masayuki FUJIMOTO

Doktor Faust hatte viele Sagen von Magiern, Teufelsbündlern, Zauberern. Die reale historische Persönlichkeit ist umstritten und bleibt undeutlich. Seine Lebensdaten liegen ungefähr zwischen 1480 und 1539. Er hatte, in einem ruhelosen, abenteuerlichen Wanderleben viel Aufsehen und Anstoß erregt. Biographie und Legende waren früh ineinandergeflossen. Das Faustbuch wurde erst durch Johann Spieß 1587 in Frankfurt a.M. zum Druck gebracht. Dieses Buch wurde als eine fromme Warnung vor Teufelei veröffentlicht. Der Herd dieses Volksbuches wollte alle Gründe von Himmel und Erde erforschen. Und er verband sich daher mit dem Teufel. Im gleichen Jahrhundert feierte der englische Dramatiker Christopher Marlowe gerade diese titanische Vermessenheit in seinem „Faust“ aus dem neuen Lebensgefühl der Renaissance heraus. Der Faust der Sage hatte sich aus bloßer Erkenntnisneugier zu widergöttlichem Tun verleiten lassen, aber in der englischen Dichtung verlangte er leidenschaftlich nach der Welt und nach Erkenntnis und gab seine Seligkeit preis. Im 18 Jahrhundert förderte Lessing die Entwicklung des Faust-Stoffes und nahm den Faust-plan auf. Der Geist der Aufklärung änderte nun den Charakter des Faust-Stoffes. Die Handlung spielte als ein Traumerlebnis Fausts ab, um ihn zu erlösen. Damit kam Lessing dem Anspruch des Jahrhunderts entgegen. 1831 vollendete Goethe das Faust-Drama. Faust erkannte im dienenden Wirken für die Gemeinschaft den Sinn des Lebens. Und sein Tod wurde zur Wiedergeburt durch die Gnade der himmelischen Liebe.

MÄRZ 1832

Es sind über sechzig Jahre, daß die Konzeption des Faust bei mir jugendlich von vorneherein klar, die ganze Reihenfolge hin weniger ausführlich vorlag.¹⁾

——「ファウスト」の構想は、最初のほうははっきりしていましたが、全体の具体的なつながりという点では、明らかにならないままに、60年以上の歳月が過ぎてしまいました。——ゲーテ

ゲーテが60年以上の歳月をかけ完成した「ファウスト」は、ドイツ語で書かれた最も重要、かつ最大の作品として有名である。しかし、悪魔に魂を売ったとされるこの人物は、多くの伝

説をうみだし、有名無名の詩人によってとりあげられ、ゲーテ以前に、すでに40を越えるファウスト物語が存在するのである。ルネッサンスに始まり、ゲーテ時代をその頂点とする個人の時代において、人々は自我の拡大を求め、何ものにも拘束されず、内的法則にしたがって自らの世界を形成しようとした。このような時代精神の中で、ファウスト像は幾多の変転を経ることになった。

1

ファウスト伝説の起源は16世紀にさかのぼる。悪魔と契約を結び、最後には地獄に連れ去られたとされる男の物語である。ファウストは歴史上実在した人物であるといわれ、公文書においても、1520年にバンベルク、1528年にインゴルシュタット、1532年にはニュルンベルクの町に現われ、その滞在が認められている。しかし、その歴史的輪郭は、はっきりとしない。生誕の地は、ヴェルテンベルク州のクリットリンゲン、又は、ハイデルベルク近郊のヘルムシュタット、名前はゲオルク・ファウスト、又は、ヨハン・ファウストと不確かである。彼が生きていた年代は、およそ1480年から1539年の間である。各地を転々とし、放浪の旅をつづけ、占星術師として、魔術師として民衆に驚異の念を起こさせ、語り草となり大きな評判をとった。しかし、大言壮語を繰り返しかせしたためか、当時の人文主義者トリテミウスやミランヒトン達の間では山師的学者とみなされ無視されていた。又、当然のごとく、宗教界からは悪魔と結託した人物として、最大の攻撃を受けていたのである。

当時、民衆のあいだでは、*quinta essentia* いわゆる「賢者の石」といわれるものの存在が信じられていた。この所有により、万物を黄金に変えることも、すべての病気を克服することも可能であると信じられていたのである。この所在をつきとめるため、当時の科学者は、占星術や錬金術にうちこむことになった。そして、これらの科学者の中には真に学問的研究に没頭し、科学の発展に貢献するものもいた。しかし、一方、自らを黒魔術と称して一般民衆を眩惑し、生活の糧を得る学者も存在した。ファウストは後者に属していたといわれる。

1587年、フランクルトの出版業ヤーハン・シュピースは、この伝記と伝説の入り混じった人物を素材にして、作者不明の「民衆本ファウスト博士」として発表したのである。

「民衆本ファウスト」によると、ファウスト博士は百姓の息子で、ワイマール近郊、ロートの生まれ、ヴィンテンベルクに親戚があったという。ヴィンテンベルクは、宗教改革時代の精神的中心地である。この町に住む彼の裕福な伯父は、ファウストを相続人とし、神学を学ぶために学校に通わせた。彼は本来頭脳は明晰、勉学に対する興味も持ちあわせていたので、優秀

な成績で修士に合格、さらに学業を修め博士となったのである。しかし、一方において彼は神の言葉を悪用し、悪い仲間とともにカルデア語、ペルシャ語、アラビア語、ギリシャ語の言葉を用い、図形や呪文、招霊術、魔術などいろいろな名で呼ばれる呪術、魔術にたずさわって、その研究に没頭していた。そして、神学博士の名を棄て、自らを医学博士と称し、占星術師、数学者となったのである。ファウストの目標は「愛してはならぬものを愛することであり、日夜それを追い求め、鷲の翼を身につけ、天と地のあらゆる奥底を究めようと欲した。そして、好奇心と不遜と軽率さにせきたてられ、ついに悪魔を目の前に呼び出すために、いくつかの魔法のことは、図形や呪文、招霊術を実行し、試みようとして企てた。」のである。

招霊術により呼び出された霊メフォストフィレスに、ファウスト博士は六つの要求を申し出ている。第一に、自分にも霊のもつ力と形、姿を身につけるようにすること。第二に、彼が望み、霊から求めることすべてを、霊がなすこと。第三に、霊は彼に奉公人として、勤勉に従い、服従すること。第四に、求め、呼ぶ時にはいつでも、彼の家に現われること。第五に、霊は家の中では、目に見えぬように働き、命じた時以外には、彼以外の何人にも見られぬこと。最後に、求めるたびに、指図どおりの姿で彼の前に現われること。であった。これに対し、メフォストフィレスは、すべてファウストの意志のままに服従すると答え血でもって書かれた契約書を求めた。

——私こと博士ヨハネス・ファウストは、確認のため自筆をもってこの文書を公に認める。私は宇宙万物を究明することを志しましたが、天より下し与えられ、めぐみによってわかち与えられた天賦の才をもってしても、それだけの能力はわが頭脳になく、また、それを人間より学びとることも不可能なので、地獄の東方の君主の僕としていまここにつかわされたメフォストフィレスと名のる霊に身をあずけ、その者を、私に必要なことを告げ教える者として選びました。彼もまた、万事、私に従順に服従することを約束しました。これに対し、私もまた彼に約束し誓いました。この文書の日付より24年が終り過ぎ去った時、彼はその流儀に従い、好むがままに、私を支配し、連れてゆき、全権をもつこと。しかも肉体、魂、肉、血と財産のすべてとともに、またその永劫にいたるまで。…… ——

この契約により、ファウスト博士は地獄に落ちる前の24年間、研究者として、人生の大いなるよろこびを味わったのである。しかし、より人々の興味をひきつけたのは、約束の年限24年が過ぎたファウスト博士の最後の光景であった。彼はその日、学生達を前に最後の演説をおこなっている。——私がこの24年間にした冒険について言えば、諸君はそのすべてが私の死後書き残されているのを見出されるでしょう。私の恐ろしい最後は、諸君の生涯、心に刻んで、警

告として下さい。諸君が神を眼前におき、神が諸君を悪魔の偽りと悪だくみから守り、誘惑に導かれぬようにし、神に従い、神に背いて劫罰を受けたこの私のように神から離れぬように願いなさい。——と述べている。そして、最後に今夜何がおこっても、決して驚かないようにと学生達にたのんだ。その日の深夜、すべてを滅ぼすかのような烈しい大風が家を包みこみ、学生達は一睡もせず、夜を明かしたという。翌朝、ファウスト博士の姿は部屋にはなく、血しぶきでいっぱい部屋の壁には脳みそがこびりつき、彼の眼と数本の歯がそこに残っていた。悪魔が彼を一方の壁から他方の壁へと投げつけた跡の恐しい光景であった、とされている。

1587年に出版された、この物語の初版は、たちまち売り切れ、第二版、第三版と版を重ねることになった。

2

シュピースのファウスト本は、民間に伝わる話を収録し、つなぎ合せ、教訓的な物語に仕上げている。シュピースは、この物語を始める前に、「キリスト教徒の読者への序言」という一文を添えた。そこにおいて、あらゆる罪業は本来劫罰を受けるべきものであり、神の確かな怒りと罰を引き受けるものであるとしても、事情の異なるにつれて、ある罪業は他の罪業より大きく重く、この地上においても、最後の審判の日にも、神によって厳粛に罰せられるものである。疑いもなく魔術と妖術は神と世間にとって最大の、最も重い罪業である。という。シュピースは悪魔と契約した人間の運命を、決してとめることのできない地獄への道として描いた。さらに彼は、ホフ氏のへの献詞の中で、悪魔の詐欺と、肉体と魂の殺害の恐るべき実例として、神に背いた人間の自信、不遜、出すぎた好奇心が人をどこに駆りたてるのか、キリスト教徒に警告するために、公に印刷し公表したと述べている。ルター派の視点から発表されたこの「民衆本ファウスト」は、あくまで、悪魔的所業に対する人々への警告書とし世に出たのである。しかし、この物語には、背後に人々を熱狂させた時代精神が含まれていた。ルネッサンスに始まり、19世紀に終焉を告げた個人の解放の時代である。徐々に信仰と伝統の権威から離れ出し、世界像の中心に個人が姿を現わし始めた時代であった。16世紀末期のドイツは混乱の時代でもある。人文主義の台頭と宗教改革の影響で人々の心は揺れ動いていた。人文主義は人間の精神をより自由に、幅広いものとした。また宗教改革は新しい信仰告白へと人々を導くことになった。新旧二つに分け隔てられた信仰を、人間は個人の意志で選ぶことになる。もはや、教会の指示に盲従することが許されないのである。宗教改革はあらゆる面で既存の秩序を崩壊させることになった。そして、その結果、今まで救済されることのなかった個人の内的自由や責任という精神的概念が呼び起こされることになったのである。しかし、その反面、人

間は今までのように、宗教的神聖な秩序の中に安心して存在することができなくなり、現世の存在と永遠の神の世界との深い谷間で、苦しみ、彷徨することになるのである。ファウスト博士の一生はまさにその象徴でもあった。

ある僧がファウスト博士を回心させようとする場面がある。

彼はファウスト博士のもとに行き、真剣に、親しく、また厳しく神の怒りと劫罰を説明し、神に罪の赦しを乞うことを勧める。

「神に自分の罪の赦しを乞いなさるがよい、そうすれば今からでも赦しを得られるでしょう。なぜなら神のお恵みは決して閉ざれることはない」

彼が話し終るまで熱心に耳を傾けていたファウストは次のように答えている。

「親愛なるお方よ、私はあなたが私に好意を持って下さることはよく分ります。あなたが今話して下さったこともすべてよく知っています。しかし、私は余りにも高く思い上り、自分自身の血をもって、忌わしい悪魔と契約し、身心ともに永遠に彼のものとなる約束をしました。一体どうして引き返すことができるでしょう」

しかし、この僧はファウストに、もう一度神の御恵みと慈悲にすがることを求め、真の後悔と贖罪を行うよう勧めた。

それに対しファウストは最後にはっきりと答える。

「ミサを挙げようと、挙げまいと、私の約束はあまりにも厳しく私を束縛しています。こうして私は神を勝手気ままに軽蔑し、神に偽証し不実をはたらき、神よりも悪魔を信じ、信頼しました。それ故、私は神のもとに行くことはできず、失った神の御恵みを頼むわけにはゆきません。……悪魔は私に約束したことを正直に守りました。だから私も悪魔に約束し契約したことを正直に守るつもりです」

ファウスト博士の契約の動機は、宇宙万物を究明することであった。現世において、世界を見極めたい、現世を身をもって認識し、追求し、享受したいという人間的衝動である。これは近代の精神の誕生であり、この時代の人々の心を強く捕えた時代精神でもあった。この「民衆本ファウスト」は、ファウスト的欲求を制御するすべも知らず、自ら天上の幸福を放棄せざるを得なかった時代の、そして、人間の悲劇であった。

3

1587年に出版されたファウスト本は、多大の影響を及ぼした。たちまちのうちに、すべてのドイツ語圏に流布したばかりか、外国にも伝えられ、新たな変転を遂げることになる。

イギリスに渡ったファウスト本は、1588年—89年にクリストファ・マーロウにより「ファウストゥス博士の悲劇的物語」として初めて戯曲化された。マーロウがテキストにこのファウスト本を用いたかどうかは、確かではないが、1590年代の前半には、ロンドンにおける初演が行われている。16世紀後半から17世紀にかけては、イギリスにおける劇文学の黄金時代である。マーロウは、ファウストの性格に新たな意味づけをもたせることによって、ファウスト本に文学性を与えることに成功したのである。

マーロウは、この作品に、「ファウストゥス博士の悲劇的物語」という表題を与えている。このことは、シュピーアのファウスト本におけるような、神に背いた人間の恐ろしい見せしめ、忌わしい実例、誠実なる警告というモチーフを含んでいない。悲劇的な主人公が登場するのである。ファウストの救いのない絶望と墮地獄も、プロメティスの失墜を思わせるものがある。マーロウの描いたファウストには、より確固とした性格が与えられた。悪魔との契約に際し、シュピーアのファウスト本におけるように「宇宙万物を究明することを志ざしたが……それだけの能力はわが頭脳になく……学びとることも不可能なので……メフォストフィレスと名のる霊に身をあずけ……必要なことを告げ教える者として選びました。」という、消極的、弱気な一面をみせていない。マーロウのファウストは、世界の支配者とし、現世において、あらゆるものを支配し、享受しようとする。そのためには、何ものをも恐れず、悪魔と契約することも辞さず、決して後悔することもしない。行動は終始一貫している。明らかに、悲劇の主人公としての人格は高められたのである。巨人的な意欲、制約なき自由への憧れ、反逆、現世への執着、これが魂の救済の代償として、ひきおこす悲劇となった。

マーロウのファウストは、その後、16世紀の終りから17世紀にかけ、イギリスの劇団により、再びドイツにやってきた。1608年にグラーツ、1626年にドレーズデン、1669年にダンツィヒとドイツ各地で上演された。そして時が経つとともに、自由勝手な改作がなされた。しかも、多くは詩人の手に依るものではなく、俳優の手に依ってなされたのである。そのため、この時期、その文学的価値は著るしく低下することになる。三十年戦争の影響もあり、文化的にも荒廃し、ファウスト本も、1599年から1674年までは再版されていない。このように衰退、変転を繰り返しながらもファウスト劇は、民衆劇として、また、人形芝居として、人々の中に生きながらえるのである。

このファウスト劇が再び注目を集めるのは18世紀啓蒙主義の時代である。

Er hätte aus unsern alten dramatischen Stücken, welche er vertrieb, hinlänglich abmerken können, daß wir mehr in den Geschmack der Engländer, als der Franzosen einschlagen; Daß

aber unsre alten Stücke wirklich sehr viel Englisches gehabt haben, könnte ich Ihnen mit geringer Mühe weitläufig beweisen. Nur das bekannteste derselben zu nennen; »Doktor Faust« hat eine Menge Szenen, die nur ein Shakespearesches Genie zu denken vermögend gewesen.²⁾

——彼（ゴットシェッド）は、自分が排斥したドイツの古い戯曲を熟読してみれば、我々ドイツ人は、フランス人の趣味よりも、イギリス人の趣味により近づくということが理解できるはずである。……我々の古い戯曲が実際に多くのイギリス的なものを持っているということは、簡単に証明することができる。その中で最も有名なものは、あのファウスト博士である。ここには、シェイクスピアのような天才にしか、考えつかないような部分が多くある。——

これは、レッシングの「文学書簡」第17号の一部である。彼は戯曲文学としては、ほとんど忘れられていた「ファウスト博士」の復活を試みる。当時、ドイツの文学界はライプツィヒ大学の教授ゴットシェッドに率いられていた。ゴットシェッドは、理性を中心とし文学理論を体系化しようとしていた。そのため、「ファウスト博士」のような、神秘主義や、茶番を含む民衆劇を追放しようとしたのである。このことに対するレッシングの反論である。レッシングがファウストの戯曲化を計画していたことは、すでに1755年、メンデルスゾーンのレッシング宛の手紙の中にみられる。ドイツ啓蒙主義の精神は、人間の理性でもって全精神生活をほしいままに統御すること、宗教上の伝統や因襲にとらわれることなく、なにものにも制約されない、内面的自由を手に入れることであった。レッシングは、ファウスト博士のもつ、知識と学問へのやみがない欲求、認識への衝動、つまり、人間としてのファウストそのものの内面の生ける成長に眼をむけたのである。

レッシングはこのような観点からファウストの魂の救済を試みようとした。それは時代の要請でもあった。しかし、レッシングの「ファウスト」の草稿は、現在、その一部が断片として残っているだけである。レッシングの試みが、どのようなものであったのかは、詳しく知ることができない。

レッシングの友人で、彼の「ファウスト劇」を見たという、ライプツィヒの大尉ブランケンブルクによると、地獄の軍団がファウストを、地獄に引き渡そうとする瞬間、天使は次のように叫んだという。

»Triumphiert nicht«, ruft ihnen der Engel zu, »ihr habt nicht über Menschheit und Wissenschaft gesiegt; die Gottheit hat dem Menschen nicht den edelsten der Triebe gegeben, um ihn

ewig unglücklich zu machen; was ihr sahet und jetzt zu besitzen glaubt, war nichts als ein Phantom.³⁾

——勝ち誇るな、お前達は人類と学問に打勝ったのではない。神は人間を永遠に不幸にするために、人間に、衝動のうちのもっとも高貴なものを授けたのではない。お前達が見たもの、そして、手に入れたと思っているものは、幻影以外の何ものでもないのだ。——

レッシングは、「人間はさわめて善であっても、なお一つならず弱点をもち、一つならず過失を行うものである」⁴⁾と述べている。知的研究そのもののために真理を求めたファウストになら、神の恩恵が授かることを信じた。しかし、レッシング自身、決してこの救済方法には満足していなかったであろう。神の理性より、人間の理性が地上において実現することを願い、生の価値は外的な作用の中ではなく、内的なものの中にある。という啓蒙主義の精神には反するものである。詩人が同時に学者として現われ、その詩的發展は同時にその研究の發展に制約された時代の限界があった。

しかしながら、ファウスト誕生より200年の歴史の中で、ここに初めてファウストの魂の救済が叫ばれたのである。そして、それはゲーテの「ファウスト」において実現するのである。

4

ゲーテがファウスト伝説の戯曲化を計画したのは、そしてその構想の時期がいつ頃であったのかに関しては、1811年から14年において書かれた自叙伝「詩と真実」の跡をたどらねばならない。

Am sorgfältigsten verbarg ich ihm das Interesse an gewissen Gegenständen, die sich bei mir eingewurzelt hatten und sich nach und nach zu poetischen Gestalten ausbilden wollten. Es war Götz von Berlichingen und Faust. Die Lebensbeschreibung des erstern hatte mich im Innersten ergriffen. Die Gestalt eines rohen, wohlmeinenden Selbsthelfers in wilder, anarchischer Zeit erregte meinen tiefsten Anteil. Die bedeutende Puppenspielfabel des andern klang und summt gar vieltönig in mir wider. Auch ich hatte mich in allem Wissen umhergetrieben und war früh genug auf die Eitelkeit desselben hingewiesen worden. Ich hatte es auch im Leben auf allerlei Weise versucht und war immer unbefriedigter und gequälter zurückgekommen. Nun trug ich diese Dinge, sowie manche andre, mit mir herum und ergetzte mich

daran in einsamen Stunden, ohne jedoch etwas davon aufzuschreiben. Am meisten aber verbarg ich vor Herdern meine mystisch-kabbalistische Chemie und was sich darauf bezog,⁵⁾

——私はできるかぎり用心し、ヘルダーに隠そうとしていたのは、私の心の底に根を下ろし、除々に成熟し、詩的な形態をとろうとしていたある題材に関する関心であった。それは「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」と「ファウスト」であった。前者の伝記には私は深く感動していた。野蛮な、乱世における粗野で善意ある自主独立のこの人物は、私にこのうえなく深い感動をよびおこした。後者の人形芝居の注目すべき物語は、私の胸に複雑多様な反響をひびかせていた。私自身もあらゆる知識を求めて彷徨し、そして早くも知識のむなしさを思い知らされていた。まだ実生活においても種々のことを試みてみたが、ますます不満や悩みを多くするだけに終わった。ところでこの題材を、その他多くのものと同じに、いつも念頭に持っていて、孤独の時にはこのことを考えて楽しんでいたが、特に筆にするまでにはいたらなかった。しかし、何よりもヘルダーに隠しておいたのは、例の神秘的秘教的な化学とそれに関することであった。——

ゲーテがシュトラウスブルクでヘルダーを知ったのは1770年の秋、21才の時であった。ゲーテの以後の発展に大きな影響を与えることになったヘルダーはホルシュタイン・オイティーン公の旅行に随伴しこの地にやってきたのである。ゲーテは彼と親しく交わり、偉大な彼の特性、博学な知識、深い識見に日ごとひかれていった。しかし、ゲーテは気むずかしいヘルダーに対して二つのことには口をつぐんでいる。一つは人形芝居のこと、もう一つは神秘的、秘教的な化学とそれに関することである。——私にとってかくも意義ぶかく、実り多かったヘルダーとの交友から目を転ずるまえに、なお二、三付言しておくことがある。私は従来私の教養に役だった事柄、とりわけ現在真剣に取り組んでいる事柄について、ヘルダーに打ち明けるのをだんだんと、差し控えるようになったのもきわめて自然なことであった。彼は、私の以前愛好してやまなかった種々のものについて私の興味をだいなしにしてしまう⁶⁾——ことを恐れたのである。

尊敬するヘルダーに対してさえ話さなかったこの人形劇に関して、ゲーテ自身、いつ、どこで見たのか「詩と真実」においても述べていないが、恐らく、彼は少年時代フランクフルトのメッセにおいて、この古いファウストの人形芝居を見たに違いない。そしてこの印象は、彼に錬金術に関する興味をもよびおこすことになる。

Aber auch so blieb das Buch noch dunkel und unverständlich genug; außer daß man sich

zuletzt in eine gewisse Terminologie hineinstudierte und, indem man mit derselben nach eigenem Belieben gebarte, etwas wo nicht zu verstehen, doch wenigstens zu sagen glaubte. Gedachtes Werk erwähnt seiner Vorgänger mit vielen Ehren, und wir wurden daher angeregt, jene Quellen selbst aufzusuchen. Wir wendeten uns nun an die Werke des Theophrastus Paracelsus und Basilius Valentinus; nicht weniger an Helmont, Starkey und andere, deren mehr oder weniger auf Natur und Einbildung beruhende Lehren und Vorschriften wir einzusehen und zu befolgen suchten. Mir wollte besonders die, ›Aurea Catena Homeri‹ gefallen, wodurch die Natur, wenn auch vielleicht auf phantastische Weise, in einer schönen Verknüpfung dargestellt wird;⁷⁾

——しかしそれにしても、この書物は晦渋で、理解しがたく、結局、ある術語の意味に立ち入って研究し、それを思いのままに使用して、何かを理解するとまではゆかないにせよ、少なくともそれを口にすることが出来ると思う程度にとどまった。この著書は多大の敬意を払ってその先駆者達に言及していたから、私たちも、自分でその源泉を探究してみようという気持ちに駆られた。こうして私たちは、テオフラストゥス・パラケルススやバジーリウス・ヴァレンティヌスの著作に向かい、さらにヘルモント、スタルキーその他にも及び、彼らの多かれ少なかれ自然および想像に基づく学説や指示を理解し、それに従うように努めた。ことのほか気に入ったのは、「ホメロスの黄金の鎖」でこの書によって自然は、おそらく空想的にはあるが、ひとつの美しい結合状態に表現されている。——

この書物とは1735年に書かれたウェリングの「魔術的神秘の書」であり、この中で、錬金術の三基本要素、塩、硫黄、水銀に関する叙述がある。1768年の夏、19才のゲーテは健康を害し、ライプツィヒからフランクフルトの両親のもとに帰った。この時に知り合ったのが、「ヴィルヘルム・マイスター」の中に挿入されている「美しい魂の告白」のモデルとなったフォン・クレッテンベルク嬢であった。彼女は、ひそかにこの「魔術的神秘の書」を研究していた。ゲーテは彼女の影響のもと、さらにパラケルススやヴァレンティヌスらのドイツ全智学者の著作に取り組んでいる。彼は自ら小型の風炉やフラスコを買い求め、ウェリングの指示に従い実験を行っていた。彼は「詩と真実」第10章において、あの神秘的で宗教的な化学研究に従事したことが、私を隠微な世界へと導き入れた。と述べているように、彼のこの研究は、ファウスト伝説の戯曲化への一つの大きな動機となっているのである。

5

ゲーテの「ファウスト」においては、ファウストが、いかに、魂の救済を手に入れるのが問題となる。16世紀に、神に背き永却の罰を受けた主人公が、知識に対する認識への衝動を絶対的なものとした時代精神の中で、18世紀にはその行為が救済に値するという啓蒙主義は、もはや通用しない。ゲーテのファウストは、助手ワグナーの、「時代時代の精神のなかへ心を打ち込んで、古人や聖賢の考えた跡を探り、振りかえって、現代の我々がどこまで大きな進歩をとげたかを知ることほど、学問の大きな喜びはありますまい」という意見に、ファウストは「おまえたちが時代の精神といっているのも、要するに先生たちご自身の精神でしかない。時代時代がそのちっぽけな精神にかたちを映しているだけにすぎぬのだ。だから、とんでもないあわれな結果が生まれたりする」と答えている。ファウストは哲学、法学、医学、そして神学までも研究しつくした学者である。しかし、彼が知りえたことは、結局、何も知ることができないということだけである。苦悩し、絶望した彼が聖書の翻訳にとりかかる場面がある。「はじめに言葉ありき」を、ファウストは、「はじめに行いありき」と書きかえている。「言葉」から「行い」へ、知の世界から、行為の世界へと、ファウストは邁進する。彼の魂の救済は、行為において成就されねばならないのだ。それ故、レッシングのファウストが、書齋に閉じ込めたのに対し、ゲーテのファウストは世界へと飛び立つのである。

戯曲は、まず天上の戯曲における、神とメフィストの会話で始まる。レッシングのファウストにおいては、戯曲は悪魔の好むゴシック寺院を舞台にし、悪魔は、あくまで神の反逆者なのである。それに対して、ここでは、舞台は天上である。メフィストさえ神の従僕として現われ、この戯曲における、新たな信仰への復帰が暗示されている。

メフィストは、神にファウスト博士を誘惑し、神の膝元から奪いとってみせましょうか、と、賭を申し出る。ここではファウストは人間の象徴である。神はこの申し出に、次のように答えている。

よろしい、お前の好きなようにさせてやろう。
かれのたましいをその根元から引きはなして、
もしおまえの手におえることなら
遠慮なくおまえの道にひきずりこんでみるがいい。
しかし、おまえは恐れいって、きつと頭をかくだろう。

「よい人間はいくら暗黒の衝動にうながされていても、
けっして正しい道はわすれない」

神はファウストが必ず自らの膝元に帰ってくることを確信している。

神の許しを得たメフィストは、ファウストのもとに近づき、この世では、しもべとして仕え、指示どおり、どんな術でもごらんに入れると申し出る。そして、ファウストがそれに満足した時、つまり、ある瞬間にむかって「まあ、待て、おまえはじつに美しい」と叫んだ時、契約は満たされるのである。「さっぱりと知識欲を投げ棄ててしまったおれの胸は、もうこれからはどんな苦しみや悲しみをも辞さぬつもりだ。おれは人類全体にあたえられたすべてのものを、内部の自己で味わいつくすのだ。おれはおれの精神で、もっとも高いものと、もっとも深いものをつかむ。おれはおれの胸の中に、あらゆる幸福とあらゆる悲嘆をつみかさねる。」ファウストとメフィストの遍歴の旅が始る。メフィストは、あらゆる魔法をつかい、ファウストにこの世の享楽を味わわせ、満足を与えることにより勝利を得ようとした。しかし、第一部におけるファウストの認識と愛をめぐる展開は、グレートヘンの悲劇で終る。第二部に入り、ファウストは美を追求することによって人生の意義を把握しようとする。しかし、この試みも、結局、ヘレナの悲劇で終り、ファウスト救済の道には連がらない。第二部、第四幕、第五幕は支配者としてのファウストが登場する。ここにおいてファウストの救済が問題となる。

ファウストは年齢すでに百歳におよび、内部に変化がおこっている。自己の衝動を追求することから、社会のために、より創造的活動をおこなう境地に達していた。

ファウストの最後の言葉である

人間叡知の最後の言葉は、こうだ――

「自由と生命をかちえんとするものは、日々、新しく、これを戦いとらねばならぬ」

だから、ここでは、子どもも大人も年よりも、

それぞれ危険とたたかって、すこやかな年月を送るのだ。

おれはそのような人間の、みごとな共同社会をながめながら、

自由の民と自由な土地に住みたい。

おれはかかる瞬間にむかって、

「まあ、待て、お前はじつに美しい」と呼びたい。

おれのこの世に残した痕は、もはや

永却を経ても滅びはせぬ。

そうした高い幸福を予感して、

おれは最高の瞬間を味わうのだ。

もはや、眼の見えないファウストは、山の麓の沼地で人々が一致協力して働く工事の音を聞きながら、ついに「まあ、待て、お前はじつに美しい」とつぶやくのである。彼はこの瞬間に死ぬ。メフィストは勝ちを確信した。しかし、この時、天使たちによってファウストの魂は救済されるのである。天使達の合唱が聞こえてくる。

「たえず努力していそしむものは、
わたしたちが救うことができます」
それにこの人には、天上から
愛の恩寵がそえられたのです。

ゲーテは、1931年、「ファウスト 第二部」完成の直前に、エッカーマンに次のように述べている。

»In diesen Versen, sagte er, ist der Schlüssel zu Fausts Rettung enthalten. In Faust selber eine immer höhere und reinere Tätigkeit bis ans Ende, und von oben die ihm zu Hülfe kommende ewige Liebe. Es steht dieses mit unserer religiösen Vorstellung durchaus in Harmonie, nach welcher wir nicht bloß durch eigene Kraft selig werden, sondern durch die hinzukommende göttliche Gnade.«⁸⁾

——この詩句に、ファウスト救済の鍵がある。つまり、ファウスト自身のなかに、最後の日まで、ますます高まっていき、ますます純粹になっていく活動があり、天上から彼を救おうとする永遠の愛があるのだ。このことはわれわれが自己の力だけでなく、さしのべられた神の恩寵が加ってはじめて昇天できるのだという、われわれの宗教観と完全に一致していることになる。——

暗黒の衝動にうながされ、誤ちを犯しながらも、向上をめざし絶えず努力したファウストの魂は救済された。彼の魂はマーロウによって神学的制限から解放され、レッシングにより知的探究心を認められ、そしてゲーテによって向上しようとする人間の努力に生の意義を見出されたのである。数世紀にわたるファウスト像の変転は、人間の可能性の限界を越えて世界の扉を開こうとした自我の主張と、同時に、それ自身のもつ危険性ととの内的葛藤の歴史であった。

註

- 1) An Wilhelm v. Humbolt Weimar den 17. März 1832
- 2) Briefe, die neueste Literatur betreffend Siebzehnten Brief
- 3) Schreiben über Lessing verloren gegangenen Faust Vom Hauptmann von Blankenburg
- 4) Hamburgische Dramaturgie 82. Stück
- 5) Dichtung und Wahrheit Zehntes Buch
- 6) Dichtung und Wahrheit Zehntes Buch
- 7) Dichtung und Wahrheit Achtes Buch
- 8) Gespräche mit Goethe Montag den 6. Juni 1831

Literatur

- Theodor Friedrich Lothar J. Scheithauer: Kommentar zu Goethes Faust PHILIPP RECLAM JUN. STUTTGART
- Fritz Martini: Deutsche Literaturgeschichte Alfred Kröner Verlag
- Hans Henning: Faust in fünf Jahrhunderten VeB Verlag
- Reinhard Buchwald: Faust Führer Alfred Kröner Verlag
- Erich Heller: Die Reise der Kunst ins Innere und andere Essays. Suhrkamp Verlag
- Emil Steiger: Goethe Atlantis Verlag
- Klassik Erläuterungen zur deutschen Literatur Volkseigener Verlag
- Goethes Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bänden Verlag C.H. Beck
- Goethes Briefe Christian Wegner Verlag
- Gespräche mit Goethe F.A. BROCKHAUS WIESBADEN
- Deutsche Volksbücher in drei Bänden Aufbau
- Dichtung und Wahrheit Insel
- ゲーテ全集 潮出版社
- ゲーテ全集 第二卷 ファウスト 大山定一訳 人文書院
- ファウスト その源流と発展 道家忠道訳編 朝日出版社
- ファウスト研究 木村謹治著 弘文堂